タウトをめぐる思い出

田中辰明×廣瀬正史

2016年11月8日、かつてブルーノ・タウトが滞在した少林山達磨寺の洗心亭にて、廣瀬正史住職と、お茶の水女子大学名誉教授の田中辰明先生にタウトをめぐる思い出を話して頂いた。

進行：鈴木敏彦、撮影：齋藤さだむ、録音・編集：杉原有紀、浅水雄紀

田中 辰明　Tatsuaki Tanaka

お茶の水女子大学名誉教授

1965年早稲田大学大学院理工学研究科修了。1965年4月-1993年3月（株）大林組技術研究所。1971年-1973年DAAD(ドイツ学術奉仕会)奨学生としてベルリン工科大学ヘルマン・リーチェル研究所留学（客員研究員）。1979年工学博士（早稲田大学）。1993年4月-2006年3月お茶の水女子大学生活科学部教授。2006年ドイツ技術者協会（VDI）よりヘルマン・リーチェル栄誉メダルを授与。2008年1月17日　厚生労働大臣より「建築物環境衛生工学の発展」の功績による表彰。現在、お茶の水女子大学名誉教授、（一社）日本断熱住宅技術協会理事長。

著書に『建築家ブルーノ・タウト —人とその時代、建築、工芸—』（柚本玲と共著）オーム社2010年、『ブルーノ・タウト - 日本美を再発見した建築家』中公新書2012年、『ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会』東海大学出版会2014年、他多数

田中：ブルーノ・タウトは日本に1933年5月3日に敦賀にやって来て、洗心亭に入居した日が1934年8月1日です。実際にはドイツから敦賀に入ってきたのですが、横浜に着いたと、自分の生涯を小説風に日記に書いています。岩波書店から出たタウト『日本の家屋と生活』という本です。ここに来るまではかなり不安がっていた様なことが書いてございますね。しかしここに参りまして、この部屋の簡素な美しさ、それが素晴らしいと最初から言っています。

当時ブルーノ・タウトを受け入れたのは現住職のご祖父様である廣瀬大蟲住職でした。奥様を連れて、それから日記には長女と書いてありますけども実際は次女の敏子様と、三人でこの洗心亭にやってこられて、日本式の非常に丁寧な挨拶をしました。それから非常に打ち解けて、特に敏子様がこの部屋に入って床の間に花を活けたり、お琴を弾いたり、掃除もやって、非常によく面倒を見てくれたと。それで敏子さんをかなり気に入るのです。というもの、敏子さんはブルーノ・タウトがドイツに残してきたクラリッサという娘とたまたま同じ年の生まれであったようですね。

大蟲和尚は大変立派な方だと伺っております。特に日本が原子力発電を始めようとした時には反対して、「電気のある便利な生活よりも貧しい生活でいい。あんなものはいらない」ということを読売新聞の正力松太郎社主に手紙を出したと伺っております。そういった方がおられたから、ブルーノ・タウトをこの時期に招き入れたのではないかと思います。ブルーノ・タウトは亡命者ですから、場合によっては厄介な人間で、断ってしまえばいいものを喜んで受け入れられた。そういったところはたいしたものだと思いますね。

廣瀬：当初はブルーノ・タウトが100日の期限でここに住むことを井上房一郎[※1]さんと契約したそうです。ドイツの大建築家ということはもう先に知らされていたようでして、そういう素晴らしい方が見えるのでしたら、三ヶ月の間ということもあったと思いますが、是非ご接待しようというつもりで受け入れられたのではないかと思いますね。

田中：ブルーノ・タウトが洗心亭に住むと、バーナード・リーチや柳宗悦といった大変な著名人が日本の各地から訪れて、12月の末にここにお泊りになって、タウトと芸術論、哲学、一般のことを話し合ったと。翌日には井上房一郎さんが参加しています。また、高崎でもだいぶ仕事をしていた建築家のレーモンド夫妻もここを訪ねています。

廣瀬：お寺に大蟲和尚が書き留めたものには「世界各国のいろいろな方が見えるので驚いている。やはりすごい建築家だ」という記述がありました。

田中：タウトの日記には「たくさんの方がここを訪れ、そうかと思うと全く客が来ない日もあった。それを閑居である」と書いてあります。サンクトペテルブルグの貴族の出身で亡命のような形で日本に来た、ロシアのブブノア夫人とは東京に行くと会ったり、こちらで一緒に散歩をしたりということも書いてあります。ワルワーラ・ブブノワは東京では早稲田大学の露文科で非常勤講師としてロシア語を教えており、あまり安定した生活ではなかったようです。タウトと通じる表現主義の素晴らしい絵や版画作品を残し、それが今では早稲田に寄付されています。

廣瀬：タウトがブブノワさんと会うときは、エリカもなにか遠慮していたくらい、お二人は仲が良くお気が通じていたという話を水原徳言[※2]さんから聞いております。

田中：ブルーノ・タウトから見るとブブノワ夫人がさらに知的な人間だという風に映ったのかもしれませんね。それと、洗心亭にいたときにタウトは当然のこと

少林山達磨寺の洗心亭にて、左が田中辰明先生、右が廣瀬正史住職。

廣瀬 正史　Seishi Hirose

少林山達磨寺 住職

1977年駒澤大学仏教学部仏教学科卒業。黄檗山禅堂（専門道場）掛錫（修行）。1981年少林山達磨寺の住職に就任。2000年ブルーノ・タウトの映像を作る会に参画。市民活動でブルーノ・タウト生誕120周年ドキュメンタリー「知のDNA　夢ひかる刻」を制作。テレビ朝日にて出演、放送。2009年第4回『ブルーノ・タウト賞』を受賞。タウトを温かく迎えたことや、三代にわたり資料の保存に努めたことが評価される。
役職歴　黄檗宗青年僧の会会長。他黄檗宗内外の役職を歴任。現在、黄檗宗大本山万福寺責任役員、黄檗宗東日本協議会会長、日本達磨会副理事長、世界達摩協会理事、高崎仏教会副会長、社会福祉法人いのちの電話理事・評議員、保護司、他。

著書に『よくわかるだるまさん』チクマ秀版社2000年、『迷いがすーっと消えるかきすて禅語帖』キノブックス2016年

ながら故郷ドイツを思っていたわけです。タウトが洗心亭に来たのが8月1日という非常に暑い時期で、ドイツ人には日本の暑さが大変だったと思いますが、移ろい行く四季のそれぞれの景色を丁寧に日記に書いています。

廣瀬：そうですね。街の風景とここから見える田園風景や自然から、安らぎや懐かしさを心に思い浮かべたのではないかと思います。この地域では人とすれ違うときに「こんばんは」「こんにちは」と挨拶をしていました。日本人の礼の仕方が非常に丁重だということで、タウトは非常に感激しているわけです。タウトは「散歩の途中で『こんばんは』と勝手に農家に入る」と地元の人たちが言っています。昼間でも「こんばんは」と言いながら入っていって、床柱をなでたり、梁を見たり、建築家だからどこに行っても家の造りに興味があったのでしょう。日本の建築は曲がったものも活かしてうまく使っていました。この辺りには古い建物も残っていたからよく観察したようです。

田中：タウトは日本語があまり達者ではないので、みんなに「ダンケ」と言ったので、この村にはありがとうのドイツ語がずっと伝わったそうですね。

廣瀬：我々も小さい頃はダンケと言う言葉だけは知っていました。またこの地域では皆で「タウトさん」「エリカさん」と親しみをこめて呼んでいました。

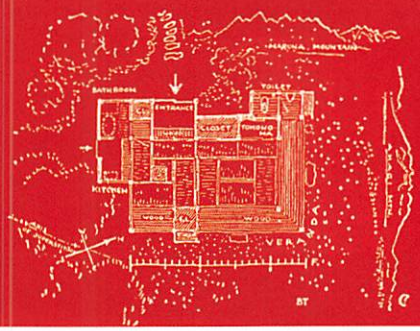
田中：ブルーノ・タウトもエリカもここでさびしいであろうということで、大蟲和尚が小学生を呼んで演芸会を開いてそれをタウトが非常に喜んだそうですね。

廣瀬：ここに来て一月ほど経った頃、昭和9年9月9日に、もう故郷に帰れないタウトを皆で慰めようとしたのだと思います。講堂で小学生が歌と大人顔負けの優雅な踊りを見せたといって非常にほめておりましたね。タウトが亡命さながらにやって来て帰れないというのを皆ある程度分かっていたようですね。

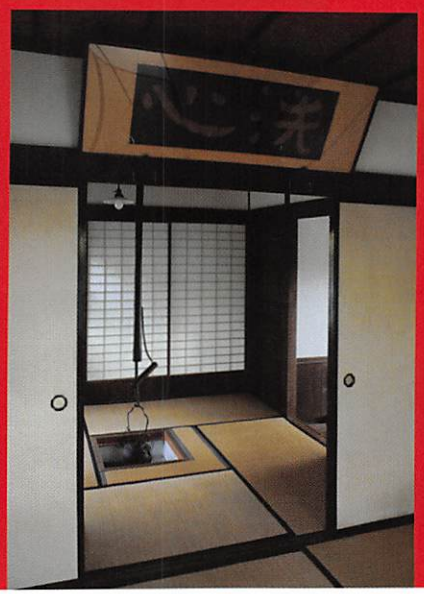
田中：タウトは旅人だったのではないかと思われます。ここには、ひと時の宿として住んでいたのではないでしょうか。タウトは今ではロシア領になった、ドイツの東プロシアのケーニスベルクの出身です。大人になってベルリンに出てきて、シュトゥットガルトのテオドール・フィッシャー※3という有名な建築家のところで修業をして、それからベルリンで自分の設計事務所を開きました。モスクワに行って仕事をして、ベルリンに戻り、日本に来ました。そしてさらにトルコへ行ってしまいました。タウトは日本にいる間は建築の仕事が出来なかったものですから、「建築家の休日」と言う風に自嘲しましたが、タウトにとっては本当に貴重な時間だったのではないかと思われますね。ドイツにいる間は建築の仕事が忙しくて、日記を書いたり文章を書いたり出来なかったのですが、洗心亭に落ち着くことによってあれだけの著作物を残して、多くの人に影響を与えました。タウトが書いた『日本美の再発見』は現在も岩波新書から出ておりますが、私は高等学校の時に読んで、生意気にも建築の仕事とは素晴らしいなと思いまして、それで建築の道に進みました。

廣瀬：タウトの導きですね。

田中：1971年から3年間ベルリン工科大学に留学いたしました。ベルリンには非常にたくさんの有名建築があります。よく私の知人が訪ねてくるので、三時間コース、半日コース、一日コースを設定して案内しました。私の恩師、建築意匠の武基雄先生が訪ねてこられたことがあります。「ブルーノ・タウトが日本に来た時に早稲田大学と東京大学で集合住宅論の講義を受けた」と言うのです。日本には当時長屋くらいしかない時代でした。感銘を受けた武先生が、ベルリンに来られて「ブルーノ・タウトの建築物を見たい」と言われました。それはオンケルトムズヒュッテという集合住宅でした。ブルーノ・タウトはベルリンにたく



ブルーノ・タウトがスケッチした洗心亭平面図



洗心亭、六畳間から四畳半をのぞむ

歓迎会後、講堂前の石垣に上って記念写真。
タウト夫妻の右は大蟲和尚の次女・敏子、大蟲和尚の右上の男の子は先代猛志和尚の幼年時代の姿

1939年９月９日、ブルーノ・タウト夫妻歓迎会

さん建物を残していると武先生から伺いまして、それから暇があると写真を撮って歩きました。残念ながら当時のフィルム写真にはカビが生え変色してしまいました。もう一回デジタルカメラで撮り直しております。また、私がタウト作品の撮影を始めたころは、本当に汚い状態が随分多かったのですが、ベルリンの建築家ヴィンフリード・ブレンネ※4さん等のご努力で、タウトの建築物の修復作業が進んで綺麗になっていきました。

廣瀬：田中先生はダーレヴィッツにあったブルーノ・タウトの自邸にはいらっしゃいましたか。

田中：はい。何度も行きました。丸いケーキを四つに切った扇子のような格好をした住宅です。外がチャコールグレーに塗ってあり、中はえんじ色やら青や黄色など原色をつかったカラフルな住宅です。タウトは「少林山はダーレヴィッツである」と日記に書いていますね。それほど、洗心亭での生活を気に入ったのではないかと思います。そしてタウトは洗心亭にいるときに熱海の日向別邸の構想を練っていたわけです。この内装が実はダーレヴィッツの住宅とかなり共通点があるのです。すなわち色がそっくりで、洋間は海老茶、臙脂といったほうがいいか、赤っぽいワインレッドというか表現が難しいのですが、それで塗装されています。それと洋間の段々に腰をかけて相模湾を見渡すという仕掛けが、ダーレヴィッツの住宅にある段々に座って大きなガラス窓を通して森をみるような仕掛けと共通点があります。

廣瀬：ここでそういうのを思い出しながら構想を練っていったわけですね。

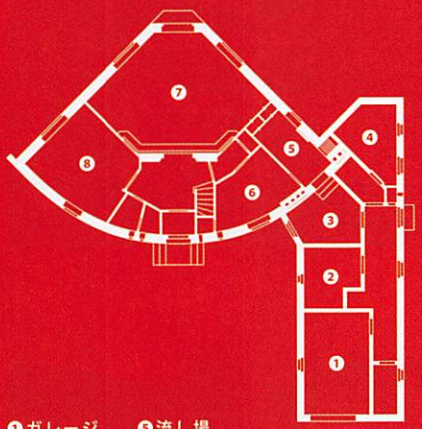
田中：そうですね。日向別邸は日本に今残っている唯一の作品で、イスタンブールにいく直前に竣工しました。だから、確かに建築家の仕事が当時できないにしろ、思いをめぐらし、本を書き、たくさんの本をここで読んでいました。驚くことに『徒然草』を読んで、鴨長明の『方丈記』を英訳からドイツ語に訳しました。ドイツ語をよく理解した上野伊三郎※5と、オーストリア人のリチ夫人に丁寧にチェックしてもらったということを書いています。共通しているのは簡素な美しさということでしょうか。以前、ドイツ文化センターのブルーノ・タウトに関する講演会へご住職さんにいらしていただきました。ブルーノ・タウトが岩波書店から『画帖桂離宮』と言う本を出しております。それに「Kunst ist Sinn」、芸術は意味だということと、簡素な美しさがいいのだと記しています。「伊勢神宮にしろ、桂離宮にしろその簡素の美しさの極みであると。一方で、日光の東照宮をキッチュといって嫌ったわけです。そして洗心亭で生活できることを非常に喜んでいました。

廣瀬：こういう場所だからこそ、ね、日本的な発想や、日本人の文化の根底にあるものを感じ取っていたところがあるのかなと思いますね。

田中：タウトは非常に鋭い観察眼を持って、ドイツにはない床の間の絵をいくつかの本に発表しています。一枚薄い間仕切りを置いて、床の間の裏側が生活の場の厠であるのは日本の素晴らしいところであると。ブルーノ・タウトは常に平和主義者でした。表と裏を当時の世の中の動きに例えて、今裏側が活動しすぎて戦争に向かっていこうとしていると批判しました。現在ではロシア領になりましたが、タウトの出身地のケーニヒスベルクから出たイマヌエル・カントという哲学者は、永久平和の本を出し「とにかく戦争は絶対にいけない」と説きました。その思想をブルーノ・タウトはずいぶん受け継いで、洗心亭にいる時にもカントの言葉をドイツ語で短冊に書いて色んな方に配りました。それが達磨寺に残っています。「Der bestirnte Himmel über mir, und das moralische Gesetz in mir」「星の輝ける大空は我が上に、道徳的規範は

ブルーノ・タウトの顕彰碑

オンケルトムズヒュッテ（1926-1931）
総住戸数1915戸、内1592戸がタウト設計による



ダーレヴィッツのブルーノ・タウト旧自邸
（1926-1927）　平面図

上：四分の一円弧状の東側外観
下：熱海の旧日向邸を思わせる居間

我が内に」といった言葉で、非常に気に入っていたようです。

廣瀬：そうですね。このお寺の本堂では北極星をお祀りしています。北極星を中心にして全ての星が運行している、それが我々の上にある。宇宙信仰といいますか、真理そのものが宇宙にゆきわたっているということを理解していたのかと思います。そして内なる道徳律というのは、仏教では仏性といって、それぞれに仏があると。カントの言葉と共通しているという喜びを言葉としてここに残したわけですよね。また、大蟲和尚は洗心亭で掛け軸を時々変えては、「玄風宇宙に弥る」教えの風が宇宙にみなぎるという、日本人でも良く分からない言葉を身振り手振りで解説したらしいですね。大蟲和尚とタウトは言葉は通じなくても、毎日二人で昼食を食べて、大声で笑っていたそうです。「何で笑っているのか不思議だ」と敏子おばさんがよく話していました。敏子は女学校を出ているのである程度は英語が出来たらしいです。

田中：現在でいう高崎女子高等学校ですね。進学校の有名女子高で、実は私の大学にもずいぶん卒業生が入学してまいります。洗心亭から見る空は非常に晴れて、いつも明るいとのことですから、おそらく星も良く見えたのだと思いますね。

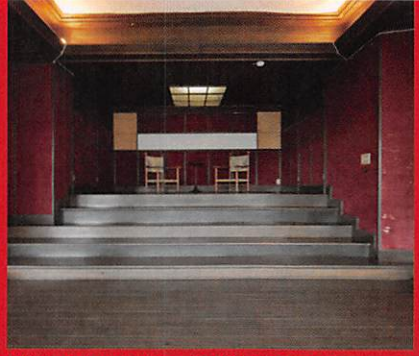
廣瀬：そうですね、このあたりは空っ風が吹いて冬場は乾燥し、雨と雪が少ないです。日照時間は非常に長いところです。タウトは喘息気味なので、晩御飯はエリカがお手伝いさんと二人で外で火を起こして、いろいろ煮焚きしたらしいですね。

田中：タウトは最初に台所を見てずいぶん驚いたようですね。日記などもタウトの口述をエリカがここで書いたのですね。ブルーノ・タウトはこの机を非常に気に入って、熱海の日向別邸でも同じものを使っています。ブルーノ・タウトは1936年にここを去るわけですけれども、実はベルリンオリンピックがあった年です。日本では1940年にオリンピック開催が決まっていました。ブルーノ・タウトは他人の言葉を使ってはいますが「愚民化する」と批判しています。ヴェルナー・マルヒがベルリンに建てた競技場はナチス建築と呼ばれました。聖火リレーと称してランナーに近隣の国を走らせて地理を調査して戦争に使ったり、ハイル・ヒトラーの敬礼がオリンピックの挨拶にもなったりと、かなり影響がありました。日本が戦争に向かっていくことを嘆き、ここから浅間山が爆発したのを見て「地球が怒っている」と言っていました。

廣瀬：タウトには日本への憧れというのがドイツ時代からあったのでしょうか。

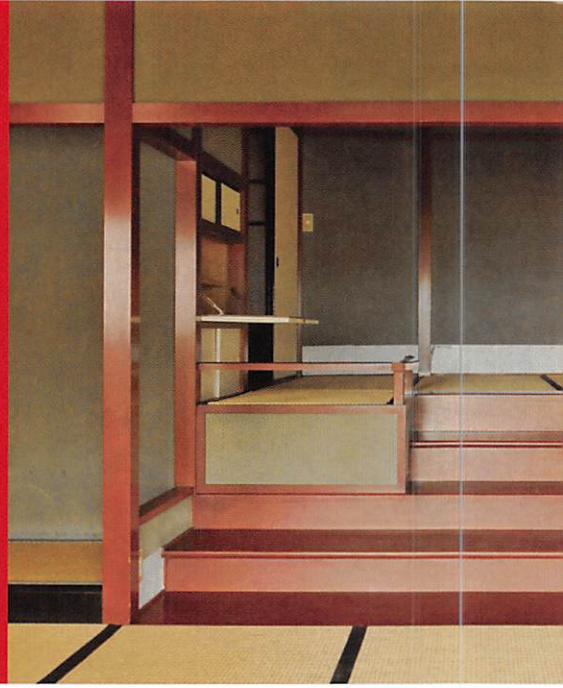
田中：そのようですね。彼が青春時代を過ごしたコリーンと言う芸術家が集まった土地がベルリンの郊外50キロほど北にあります。そこの娘たち、実はドイツにおいてきた正妻ヘドヴィックとその姉妹達を思い出したことも日記に書いてあります。コリーンでタウトはヘドヴィックと結婚しました。そこに今で言う農林省から派遣された北村という技師がいて、造林技術を勉強していたらしいのです。その人から浮世絵を勉強したり、日本文化を紹介されたりして日本に憧れるようになったと書いています。また、日本には、タウトにとって有能な秘書のようなエリカという伴侶を連れてきました。日記でも何でも婦人と書いてありますけれども、籍は入っていない伴侶で、タウトとの間にクラリッサと言う娘がいました。パウル・シェーアバルトという幻想的な詩人で、「ガラス建築」をタウトに示唆した人に憧れているがために、ブルーノ・タウトは自分の娘にもその小説の主人公の名前をつけました。クラリッサはもう亡くなりましたが、スザンネ・キーファ・タウトという娘さんがまだ居られるのです。何回か訪ねて行った折に「ぜひお祖母さんとお祖父さんが住

旧日向別邸（1935）　平面図



洋間から上段を望む。色彩や段を用いてることなどがタウトが自ら設計し日本へ脱出するまで住んでいたダーレヴィッツの旧自邸と酷似している

旧日向別邸　日本間から洋間、社交室を望む



日本間上段番頭台脇のライティングデスク

んだ洗心亭と、遺作である日向別邸に行きたい」と言うので、何回もいらっしゃいと言ったのですが、病気になったりして今日に至っています。もう、80歳ぐらいだと思います。一度、ここの小さい達磨をお持ちしたことがありまして、意味を説明するのが非常に難しかったですね。大蟲和尚は、火災があって荒れていたこのお寺を再興に来られた方ですね。本当は別のお寺の住職になるはずだったのですが、そこには跡継ぎが出来たのでこちらに来て、現在のような立派なお寺にする礎を築きました。その時にやはり達磨を売ったそうなのです。それに対してやっぱりブルーノ・タウトはちょっと批判的でした。

廣瀬：お守りとかお札を売らなくてはいけないのは、本来の形じゃないと。

田中：ブルーノ・タウトはプロテスタントの家に生まれて、二つほど有名なプロテスタントの教会を改修しました。カトリックだったものをプロテスタントに改修して、内装工事などをしたわけです。カトリックは実は護摩などを売っており、それを宗教改革者のマルチン・ルターが批判したわけです。ドイツでは教会税があり、教会が特に商売をしなくてもお金が入ってきます。日本ではそういう仕組みが無いので、お寺は自活する方法を考えなくてはなりません。タウトは大蟲和尚について「ふんどし一本で子どもたちの散髪をしているのが非常に素晴らしい」ということも日記に書いていました。

廣瀬：人間的な面を見たわけでしょうね。多分その10歳くらいの子どもは私の父親です。人の家の子の散髪はしないでしょうから。

田中：タウトは常にルポライターだったような感じを受けますね。ブルーノ・タウトが憧れた日本人は鴨長明にしろ、松尾芭蕉にしろ、旅行しながら書いていたところで共通点があるのではないでしょうか。

廣瀬：あまり西には行ってないですね。

田中：下関から出国していますが、実際に見聞したのは大阪までが限界ですね。それから向こうには行ってないですよね。この間、工学院大学へバウハウスの学芸員であるトーステン・ブルーメ※6さんが来られて講演されました。ブルーメさんがいろいろ調べてみると、日本では工作連盟と呼んでいるヴェルクブントという団体でブルーノ・タウトが先に会員になっていて、ヴァルター・グロピウスもそこの会員になって、おそらくそこで切磋琢磨したアイディアがバウハウスとなって生まれたのではないかと講演されていました。ブルーノ・タウトが活躍した時代と、バウハウスが活躍した時代は時期的に一致しています。しかし、ブルーノ・タウトがバウハウスで講義したことはありません。おそらくグロピウスからいうと、タウトはあまりにも偉い人でバウハウスが掻きまわされてしまうのではないかと考えたわけです。実はバウハウスは工芸が得意でした。けれども、ブルーノ・タウトはドイツにいる間は建築の仕事が忙しくて、工芸はやっていなかったはずです。そしてこちら高崎に来て工芸を教えました。井上房一郎さんに資金を出してもらい、ここ高崎に日本のバウハウスを作るといった構想もかなり出来ていたみたいです。

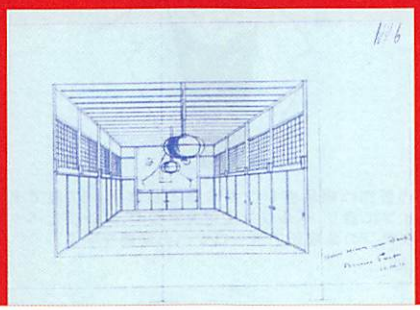
廣瀬：そうですね。建築工芸学校を作ろうとして、縁も作ろうとしたのでしょうね。

田中：結局、資金的に成り立たないとして計画がだめになり、ブルーノ・タウトは非常に落胆します。ですからタウトはグロピウスの上を行く建築家だったと見ていいのではないでしょうか。世界の四大建築家と言うと、ル・コルビュジエとフランク・ロイド・ライト、そしてバウハウスの初代校長のグロピウスと、最後の校長のミース・ファン・デル・ローエです。バウハウスでは、有名画家のパウル・クレーやカンディンスキー、そのほ

エリカがタウトの文書を清書した、洗心亭の折り畳みのライティングデスク

タウトの改造計画に基づいて改修された当時の大講堂（1960）

少林山建築工芸学校
1934年、大講堂には建築を志す学生たちが何人も居住して、ダウトの指導に従って製図作業をする設計室と化していた。タウトは学生たちが薄暗い堂内で採光に苦労している事を考え、桂離宮・古書院の採光を参考にし、壁面を欄間にするなどの大講堂の改造設計図を書き残した。
この改造計画は後に修正箇所はあったものの採光などの点はそのまま採用され1960年に改修された。1934年12月には少林山建築工芸学校の構想案がまとまるが残念ながら実現できなかった。



タウトの改造計画設計図の大講堂の内観透視図

デスマスク

かヨハネス・イッテンという画家でもあり美術教育者が教えていました。「絵を描くのは才能ではなくて教育すればある程度まで行く」というのがイッテンの考えだったようです。そんな背景が影響しあったところで、タウトが来日しました。大蟲和尚に迎えられて、気に入って100日の予定が二年二ヶ月滞在しました。一方で政治に翻弄されたということもあるでしょうね。二・二六事件が起きて、余り新聞で報道されないことを心配して、「日本はどちらへ向かっていくのであろう。やはり日本を出なくてはいかん」という気持ちが段々高まってきたのでしょう。1936年10月８日に辞去して、1936年10月15日にイスタンブールに向かって旅立ちます。

廣瀬：日記も二・二六事件の頃から一時は書かれていません。それだけショックだったのかもしれないですね。タウトが10月８日に旅立つとき、すぐこの階段の下まで迎えの車が来たそうです。しかしそこで乗らないで、わざわざ橋を渡って、たくさんの人が見送りしてくださる藤塚の街まで歩いて行ったのですね。村人たちが総出で「タウトさんバンザイ！エリカさんバンザイ！」とやったら、タウトが今度は「八幡村バンザイ！少林山バンザイ！」と言い、それでみんな感激して、拍手もして、わっと盛り上がったそうです。この近くで災害や洪水があると、タウトはそんなに裕福ではないのに、ドイツから持ってきたお金を切り崩して、お見舞いとして被害にあった全戸にブリキのバケツを配りました。「残った物は特に貧しい人に差し上げて」と地元に預けたということです。普段のお付き合いがあったからこそのお見送りなのでしょうね。

田中：やがてブルーノ・タウトが下関から関釜連絡船に乗って朝鮮を渡ってイスタンブールへ行く時も、敏子様は横浜まで泣きながら送っていったということが日記に書いてございますね。タウトはイスタンブールに行き二年ぐらいで過労のために亡くなります。ブルーノ・タウトが若くして亡くなってしまって非常に残念です。タウトの死後にエリカが途中で拘束されたりしながら、全ての遺品とデスマスクを日本に持って帰ってきて少林山に収めました。そのおかげで篠田先生が日記を翻訳されて、その他の本もかなり日本で出版されるようになりました。エリカの貢献はすごいですね。

廣瀬：エリカは高崎では水原徳原先生のところにお邪魔して生活していたようです。そして一度は敏子の嫁ぎ先の桐生まで行ったということです。

田中：後に敏子様のお嬢様が建築家になられたということは、やはり間接的にブルーノ・タウトの影響があったのではないでしょうか。

廣瀬：今は桐生でご主人と一緒に建築をされています。

田中：今日、ブルーノ・タウトとエリカが二年ほど住んでいた洗心亭で、住職と対談させて頂けるなんて本当に光栄でございました。

※１　井上房一郎（1898-1993）群馬県出身の実業家。高崎観音、群馬音楽センター、高崎哲学堂を建設した。タウトやレーモンドを支援した。
※２　水原徳言（1911-2009）タウトの唯一の弟子。井上工芸研究所にてタウト工芸作品のために働いた。タウトの死後はタウトの言説を近くで知る者として展覧会や書籍に言葉を寄せている。
※３　テオドール・フィッシャー（1862-1938）ドイチャーウェルクブントの初代会長を務めた建築家。代表作にミュンヘンの公共住宅、イェーナ大学本館、シュトゥットガルト美術館。
※４　ヴィンフリード・ブレンネ（Winfried Brenne）建築家。ベルリンにあるタウト建築の色彩の修復、ユネスコ世界遺産文化遺産登録に尽力した。
※５　上野伊三郎（1892-1972）「日本インターナショナル建築会」の会長。タウト来日時に入国ビザを手配し、タウトを全面的に支援した。
※６　トーステン・ブルーメ（Torsten Blume）バウハウスのキュレーターであり研究員。タウトが提唱する「都市のクリスタリゼーション」がバウハウスに影響を与えたことを講演した。

参考文献

田中辰明、庄子晃子『ブルーノ・タウトの工芸―ニッポンに遺したデザイン』LIXIL 出版、2014 年
田中辰明『ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会』東海大学出版会、2014 年
田中辰明、柚本玲『建築家ブルーノ・タウト―人とその時代，建築，工芸―』オーム社、2010 年
広瀬正史『―寺報― 福 FUKU 第 31 号』少林山達磨寺、1995 年
ブルーノ・タウト『日本の家屋と生活』篠田英雄訳、岩波書店、1966 年